

令和 元 年 6 月 6 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16886

研究課題名（和文）日本語話者による中国語機能語の習得に関する実証的研究

研究課題名（英文）The Acquisition of Chinese Function Words by Native Speakers of Japanese

研究代表者

劉 曩 (LIU, Biao)

九州大学・言語文化研究院・助教

研究者番号：00756223

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は難しいと考えられてきた機能語「了1」「了2」「着」「過」「就」「才」に焦点を当て、某大学の初級中国語履修者を対象に、横断的調査を用いてそれぞれの機能語の習得難易度を推定した上、同じ機能語の異なる機能には難易度の差が認められた。このような差が生まれた理由として、母語の転移と文構造の複雑さが考えられる。そこで、可能な限り難易度の差を軽減し、学習効果を高めるため、本研究は主にインプットの頻度という観点から複数の実験を行い、より有効な教授法を実現するための提案を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教科書における文法記述の意義は言語学研究への貢献だけではなく、学習者が目標言語を勉強する際に手助けになるはずであるが、現時点では研究者によるトップダウン的な記述が多い。これに対して、本研究は学習者の立場から学習状況を把握し、効果的な教授法を提案したことは、日本語話者専用の教育文法の構築に貢献できると考えられる。また、中国語教育に関する先行研究はほとんど1回きりの調査に基づいたものであり、研究成果を教育現場への貢献まで発展させたものは少ない。そこで、本研究の成果を現場へ還元することで、機能語に関する治療的な教授法の実現とともに、質の高い教材開発への革新的な知見が導き出されることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on the learning result of beginner-level learners' "le1", "le2", "zhe", "guo", "jiu", "cai". Cross-sectional study was used in this study. It was found that in most cases, there are significant differences between the different functions of the same function word. It can be assumed that this result is due to language transfer and the complexity of sentence structure. Therefore, in order to reduce the differences of learning difficulty and enhance the learning effect, from the perspective of input frequency, this research performed several experiments and made some suggestions in order to achieve a more effective teaching method.

研究分野：言語学

キーワード：機能語 習得難易度 文構造の複雑さ インプット頻度

1. 研究開始当初の背景

一般的に言えば、中国語学習者にとって内容語より機能語のほうが難しいとされる。その中では、特に難しいとされるものとして、「完了」を表す動詞接辞の「了1」、「新状況・変化」を表す文末助詞の「了2」、「持続」を表す「着」と「経験」を表す「过」などの助詞と、「就(じきに)」、「才(ようやく)」などの副詞が挙げられる。これらの助詞と副詞の誤用にはさまざまなパターンが見られており、学習者のみならず、担当教員を悩ませる文法教育上の問題点となっている。

同時に、日本の大学における中国語教育では、次のような課題が存在していると考えられる。

まず、外国語教育では学習者の母語を考慮する必要があるが、一律の文法記述から母語別文法記述への転換が強く求められるが、残念なことに現時点の中国語教育では学習者の母語に対する配慮がほとんど行われていない。

次に、先行研究の多くは中間言語コーパスに基づいているが、この方法には限界があると考えられる。中国語学習者コーパスの多くは学習者による作文を集めたものである。周知のように、学習者はある文法項目を理解できず使いこなせない場合にはそれを「回避 (avoidance, Schachter 1974)」する傾向が指摘されており、作文では回避が特に生じやすいと予測される。

さらに、既存の学習者コーパスは論説ジャンルに偏っており、話し手と聞き手によるコミュニケーション上の談話表現や物語に含まれる複雑な時制問題を扱うことは難しい。

2. 研究の目的

以上の課題を解決するため、本研究は一連の実験から得られた結果を活用し、中国語の機能語の効果的な教授法を実現することを目的として行われた。また、学習者の産出的知識を測定するため、和文中訳テストを用いた。この測定方法により、自由作文では生じやすい「回避」の可能性を減らすことができると考えられる。

3. 研究の方法

中国語教育における文法記述は、中国語学、対照言語学の既存成果に大きく依存している。しかし実際のところ、学習者にとって各文法項目の機能には難易度の差が見られるため、従来の成果だけでは十分に説明できない。本研究の目的を達成するためには、一般的に難しいと考えられる機能語の「了1」「了2」「着」「过」「就」「才」に焦点を当て、某大学の初級中国語履修者を対象に、横断的調査を用いてそれぞれの機能語の習得難易度を推定した上、同じ機能語の異なる機能には難易度の差が認められた。このような差が生まれた理由として、母語の転移と文構造の複雑さが挙げられる。そこで、可能な限り難易度の差を軽減するため、筆者は主にインプットの頻度という観点から一連の実験を行い、より効果的な教授法を実現するための提案を行った。

4. 研究成果

第二言語習得の研究分野では、インプットの頻度による学習効果は様々な研究において証明されている (Larsen-Freeman 1975, Ellis & Schmidt 1997, Goldschneider & DeKeyser 2001 など)。第二言語習得にとってインプットは非常に重要な役割を果たしており、その頻度は定着度を高めるための効果的な手段でもある (Ellis 2002)。

当然、それぞれの文法項目には難易度の差が存在しており、本研究が扱った「了1」「了2」「着」「过」「就」「才」に関して言えば、「了1」「了2」は比較的難しく、「着」「过」「就」「才」は比較的簡単であることが分かった (劉・董 2018、劉 2018)。劉・董 (2018) では、1回20分間、計2回の練習を行った後に行われたテストの結果を見ると、「着1 (灯亮着)」の正答率がやや低く、61.60%となっているが、その他の文法項目は比較的の高い結果となっている。具体的には、「着2 (她坐着看书)」は86.60%、「过1 (你去过上海吗?)」は93.90%、「过2 (我洗过澡了)」は79.30%、「就1 (他就去)」は87.20%、「就2 (他每天晚上9点就睡觉)」は78.70%、「才1 (她才来)」は71.30%、「才2 (我每天晚上12点才睡觉)」は77.40%である。つまり、「着」「过」「就」「才」のそれぞれ2種類の用法に関して言えば、2回のインプットにより、比較的の高い学習効果が得られることが示唆された。

これに対して、動詞接辞の「了1」と文末助詞「了2」は比較的難しい結果が推定された (劉 2018)。具体的には、「着」「过」「就」「才」と同じように、20分間の練習を2回実施した場合、動詞接辞「了1」の2種類の用法、つまり「過去完了」と「未来完了」の正答率がそれぞれ12.20%と24.40%と非常に低い結果となっている。その一方で、文末助詞「了2」の2つの用法、「変化」と「確認・報告」の正答率が62.80%と37.20%であるため、こちらも満足できない結果となっている。

以上の結果から、学習者にとって「了1」「了2」は比較的難しく、「着」「过」「就」「才」は比較的簡単であることが推定された。その主なる理由として、「了1」と「了2」は表層的

には同じ形式であるため、それぞれの2種類の用法を教えると、学習者は計4種類の「了」の用法を使い分ける必要があり、より高い負荷がかかることが挙げられる。

そこで、「了1」と「了2」の計4種類の用法の学習効果を高めるために、本研究はさらにインプットの頻度の観点から研究を実施した。具体的には、ほぼ同じ練習時間(40-45分間)を3回と4回にわけて練習を行うことで、学習効果にどのような影響が出るのか調べてみた。その結果、次のような示唆が得られた。

まず、15分間の練習を3回実施した場合には、正解率が70.7%-84.2%に上昇したことが推定された(劉2019)。具体的に見ると、動詞接辞「了1」の「過去完了」と「未来完了」の用法の正答率が82.00%と75.70%であり、文末助詞「了2」の「変化」と「確認・報告」の用法の正答率が84.20%と70.70%である。いずれも2回の練習後の結果を大きく上回っている。

次に、10分間の練習を4回実施した場合には、動詞接辞「了1」の「過去完了」と「未来完了」の用法の正答率が99.59%と85.19%に達しており、文末助詞「了2」の「変化」と「確認・報告」の用法の正答率が98.77%と93.30%に達していることが判明した(近刊)。

以上の研究結果から、比較的に難しいと考えられる機能語の複数の用法を教える際には、少なくとも3回のインプットを与える必要があることが示唆された。

同時に、インプットの頻度以外、指導順序、文法構造の複雑さ、インプットの間隔などの要素も学習効果に影響を与えられられる。

指導順序に関しては、山崎(2010)、荒川(2010)と王(2014)がいずれも「了2」を教えるから「了1」を教える指導順序を提唱しているが、その実際の教育効果について検証が行われていない。「了1」を先に教えた場合と「了2」を先に教えた場合では、どのように習得過程が異なるかについて、許・鈴木・劉(2018)による実証的な研究が行われた。この研究では、文法習得難易度の異なる「了1」と「了2」の指導順序を変更することで、それぞれの習得にどのような影響を与えるか調査が行われた。その結果、産出的知識に関しては、後に教えられた「了」は習得が進む結果が報告されている。つまり、先に学習した「了」に比べ、その後勉強した「了」のほうが習得が高まることが推定された。

文法構造の複雑さに関しては、機能語を教えるとき、学習者に言語学に関する知識が不足している場合には、その意味や用法を十分に理解できない可能性があると考えられる。このため、難しいと考えられる機能語を教える際には、文法構造など形式的側面を強調する必要があることが指摘されている(劉2018、劉・董2018)。

インプットの間隔に関しては、新しい文法項目を学習する間隔は、1週間空けるよりも3日から4日程度空けたほうが効果的であることが、Suzuki(2017, 2018)によって指摘されているため、本研究はこの主張を妥当なものと考え、実験ではインプットの間隔を3日から4日程度空けて実施した。

一連の研究の結論として、難しいと考えられる機能語を教える際には、定着率を高めるためには少なくとも3回以上のインプットを、学習後に3日から4日程度の間隔を空けて行うことが必要であることが推定された。また、指導を行う際には、その意味、用法の側面よりも、文法構造など形式的な側面に注目すべきということが提案された。

しかし、ほとんどの中国語教科書では、それぞれの文法項目の練習問題は、基本的にその課の内容に含まれているが、それ以降の課において含まれていないことが多い。したがって、インプットは1回きりとなっているため、本研究が提示した指導方法を実現することは非常に難しい。この問題を解決するためには、インプット頻度に特化した良質な中国語教科書の作成、ないしe-learning教材の開発が求められる。これを今後の教育上の課題としたい。

なお、応募当初は投射モデルなど既存の第二言語習得理論を援用し、指導順序の観点からアプローチする予定であったが、許・鈴木・劉(2018)の共同研究を通して、指導順序の教育効果は限定的であることが推定された。このため、本研究は指導順序による教育効果を考慮しつつ、主にインプットの頻度という観点から研究を実施した。

今後は、初級学習者のみならず、中級、上級学習者を対象に、同じ機能語のより多くの機能について研究する予定である。また、日本の大学における中国語の授業では、人的・時間的な制約等により、十分な練習時間を確保することは難しいと考えられる。このような問題を考慮しながら、本研究の成果を踏まえて、より多くの機能語の効果的な指導方法、文レベルを超えた談話レベルにおける中間言語語用論に関する諸問題を、これからの研究課題として努力を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

劉 龔「探索词尾“了1”和句尾“了2”更为有效的教学方法 - 从“指导顺序”、“句法结构”、“输入频次”和“输入间隔”的角度出发 - 」, 『言語科学』(九州大学大学院言語文化研究院言語学研究会), 54, pp.55-64, 2019.3. (査読なし)

劉 龔, 董玉婷「日語母語者漢語虛詞習得研究 - 以“着”、“过”、“就”、“才”为例 - 」, 『福岡大学人文論叢』, 50, 3, pp.835-849, 2018.12. (査読なし)

劉 龔「中国語の機能語の習得に関する実証的研究 - 動詞接辞の『了1』と文末助詞の『了2』を例に - 」, 『言語科学』(九州大学大学院言語文化研究院言語学研究会), 53, pp.89-98,

2018.3. (査読なし)

劉 龔「日语母语使用者汉语副词“就”和“才”的习得研究」,『人文学研究所報』(神奈川県人文学研究所), 56, pp.25-34, 2016.9. (査読なし)

〔学会発表〕(計 2 件)

劉 龔「关于虚词“着”、“过”、“就”、“才”的习得研究」, The 10th Annual Conference of the International Association of Chinese - Japanese Contrastive Linguistics, 2018.8.

劉 龔「動詞接辞の『了1』と文末助詞の『了2』の機能に関する考察」,『第64回九州中国学会』, 2016.5.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。